

日本基督教学会は一九五二年に設立され、目的として「キリスト教を学問的に研究する者が相互の連絡を図ると共に、キリスト教学の発達を期する。」(学会規約第三条)と定まる。会員数は七〇〇名(団体)近くあり、キリスト教界では最大規模の学会となる。学会誌『日本の神学』(教文館)は五七号が最新号となっている。発表者は専務理事として二〇一五年より一期二年を二期、つまり四年務め、この九月に次期専務理事に交替する。

さて従来、本学会のひとつの問題は「神学」か「キリスト教学」なのかであった。学会名が後者であるのに対して学会誌は前者を名乗る。神学が信仰のみならず教會的視点をもつのに対して、キリスト教学は教會に拘らないと言えるかもしれないが、両者の関係は未だに問題であり続ける。しかし日本の学術をめぐる現状は、学会がもはやこの種の内的な問題にのみ注意を傾けることを許さない。そこで発表者自身は一旦この区別は棚上げにしてもよいと考えている。

そもそも神学であれキリスト教学であれ、その学問性は何であるのか。学問が対象と方法論に従って分類されるとするならば、たとえば「キリスト教」が対象となるとしても、その場合「キリスト教」とはどの範囲を指すのかは明確ではない。教會なのか、あるいはもう少し広く文化現象も含めるのか。さらに方法論としては、どのような独自のものがあるのか。たとえば聖書学などは歴史学の方法論を用い、組織神学(教義学)を批判するが、それ自体単なる歴史学にとどまるとすれば、もはや宗教としての「キリスト教」に関わるものではなくなる。そうなると果たして聖書学は神学なのだろうか。神学の学問性の問題は、学会の専務理事としてよりも神学部の学部長経験者として切実に感じてきた。なぜなら神学というものが社会のなかで認知されていないので、たとえば入試で苦労する、とか、他学部から何をしているのか分からないとの声が聞こえてくるからである。聖書のお勉強、牧師養成などさまざまな誤解、曲解が見られる。神学というものそれ自体の学問性を明確にし、社会においても理解される必要を感じる。

このように考えているところ『二〇一七提言』が出された。すでに学会においては、準備をしてさまざまな施策を講じてきたところであり、この提言に対応するものを挙げてみたい。研究者の倫理規定の制定(二〇一六年九月)、「若手研究者イニシアティブ」の設置(二〇一七年九月)、「日本基督教学会賞」の設置(二〇一七年九月)、論文投稿制度の設計(二〇一七年九月)、『新版キリスト教大事典』(教文館)の制作のための編集委員会の設置(二〇一五年総会)、以上である。これらは研究推進、若手の育成、学会の社会への発信を目的としている。とくに大事典の制作は、まだ緒についたばかりではあるが、標準的学知の形成は学会の社会的責務と思われる。

時代に応じて諸施策を展開せねばならないのだが、しかし他方で留意すべき点もある。現代は何であれ、数値と可視化、成果主義が猛威を振るっているが、本来神学(また人文学)はそのようなものでは測れないものである。その本質を見失わないようにしたい。ただし問題は、数値と可視化、成果主義には説得力があることである。数で表す、見えるようにする、成果を主張する、これらはとにかく説得力がある。しかし数は誤魔化すことができ、可視化は表面だけでよく、成果も実質とは関係がない場合があることは明らかである。そこで考えねばならないことは、私たちの学問固有のものを形成し、説得力ある仕方で開催することであろう。その方策を少しは実施してきたつもりである。しかしまだまだ十分ではない。それでも目指すべき目標はここにあると考えている。